

特集 アスベストの健康被害を考える

【巻頭言】

大 塚 明 廣 (徳島県医師会環境保健委員会)

曾 根 三 郎 (徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部分子制御内科学分野)

アスベスト暴露による肺癌や中皮腫等の重篤な健康被害の発生は以前より指摘されていたが、2年ほど前にクボタがアスベスト関連疾患の発生状況を発表して以来、マスコミで何度も取り上げられるようになった。アスベストが生活基盤となるあらゆる建物や施設、日常品に至るまで材料として使われていることが明らかとなり、アスベスト暴露は今や大きな社会問題となりつつある。アスベストに関わる業務による職業がん発生について、平成15年度の労災認定者数は肺癌・中皮腫を合わせて121人と、職業がん全体の認定者数141人の約86%を占めており、その5年前の平成10年度の42人と比べて、3倍になっている。

昨年度、徳島県においても胸膜中皮腫の労災認定患者が出たことが報道されたが、それとあわせて徳島県アスベスト健康被害対策協議会が設立され、徳島大学での学術的研究、行政のアスベスト被害の取り組み、地域の病院、保健所での対処方法、徳島県医師会としての会員への周知等が協議された。

今回の特集ではアスベスト暴露による健康被害について、徳島大学や医師会の先生方、また行政の方々にそれぞれの観点から、その現状と問題点について執筆していただいた。

まず、徳島県医師会産業医部会の斎藤義郎先生にはアスベスト被害の状況とその対応について報告していただいた。その中で、わが国のアスベストは1974年をピークにその前後26年間に毎年20万トン以上輸入され、その多くが建築資材として使用され、今後それを使用した建築物が解体されると、アスベストに起因する肺癌・中皮腫はその潜伏期が20~50年と長いため、今後多数の患者発生が予想されるとの報告がなされた。さらに、実際に解体作業する事業所は50人以下の小規模な企業であり、産業医が現場に行って労働者や周辺住民に的確なアドバイスする必要があると報告された。

次に徳島県保健福祉部健康増進課の佐野雄二先生に徳島県におけるアスベスト健康被害対策(健康相談の現状)について報告していただいた。平成7年から9年間で徳島県での中皮腫死亡数は34人で男性26人、女性8人であり、毎年1~5人の死亡数であった。また昨年よりアスベストに関する相談窓口を県庁や保健所に設けて、相談内容によって各部署で対

応しているとの報告があった。アスベストを扱う職業に従事していた人については国の労働基準監督所で対応し、一般県民からの健康相談は開設時より148件あり、相談者にアスベスト暴露のリスクがあれば徳島大学病院呼吸器・膠原病内科を中心とした「診療ネットワーク」に紹介しているとの報告をいただいた。

次に徳島労働局労働基準部労災補償課の菊池宏二先生に労働分野における健康被害対策(労災補償制度)について報告していただいた。その中でアスベストによる疾病の認定基準ポイントは中皮腫又は原発肺癌において、明らかなアスベスト肺所見が認められ、かつ、アスベストにさらされる作業に従事したと認められる場合等であるとの指摘があった。

徳島大学生体防御腫瘍医学講座環境病理学分野の泉啓介先生と坂東良美先生には胸膜中皮腫の組織診断における問題点を報告していただいた。その中で、生検組織でも悪性中皮腫と確定できない症例にしばしば遭遇するが、その中には分化度が低い場合に加えて、生検材料が小さすぎる場合、採取時の組織の座滅が著しい場合などがあり診断に苦慮するが、免疫組織学的な検討が最終診断には不可欠であるとの報告があった。

次に、徳島大学生体防御腫瘍医学講座病態放射線医学分野の辻川哲也先生にアスベスト関連の胸膜疾患の画像診断について、胸部単純X写真では異常所見所見の解釈に難渋する症例が多く、鑑別診断にはCTによる精査が必要との報告があった。

最後に徳島大学病院呼吸器・膠原病内科の矢野聖二先生から、難治性とされる悪性胸膜中皮腫の最新治療について報告していただいた。その中で外科手術療法、全身化学療法、放射線照射療法の他に、新しく研究開発中である分子標的薬についての報告があった。それぞれ活発な執筆がなされ、関心の高さが浮き彫りとなった。

このようにアスベストの健康被害については、その疾患に罹患している人たちの発見、診断、治療、労災補償などについて関係分野の人たちが協力し、少しでもこのセンセーショナルな国民的な病苦を長期にわたって計画的に取り除いていく取り組みが必要であると考えられる。